

琉球大学学術リポジトリ

[抄録] サトウキビの開花抑制に関する研究

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 清二 (抄録) , Azuma, Seizi メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015293 |

サトウキビの開花抑制に関する研究

(T. Raja Rao and K.K. Srivastava-
Indian Institute of Sugarcane Research,
Proceedings of ISSCT 13th Congress,
Taiwan : 476~483)

1961年から1966年にかけて Lucknow (N-26°45') でサトウキビの化学薬剤による開花抑制試験を実施した。当地ではサトウキビの花芽分化は9月の第3, 4週に起るので, 9月の第2週から10月の第1週にかけて, MH, ナフタレン酢酸はha当たり2.25kg, 4.5kg, 硝酸コバルトは1.12kg, 2.25kg, 4.5kg, P-フェニレン・デアミン, カラコール, ヒドロキシノンは1.12kg, 2.25kg, Verseneは1.0kg, 2.5kg, 5.62kg, PCPは1kg, 2kg, 2.25kg, 5.62kg, 6kgを3200ℓの水に溶かし, 1回から6回散布

まで行なった。

その結果9月下旬にPCPを散布すれば効果の大きい(90%以上抑制)ことがわかった。MH, ナフタレン酢酸, 硝酸コバルト, P-フェニレン・デアミン, カテコール, ヒドロキシノンおよびVerseneも30~60%の間で開花を抑制した。

処理して開花を抑えた茎は無処理の開花茎よりも糖度が3月に高かったが(83.0:74.5), 2月にはそうでなかった(78.8:85.9)。熱帯地方では開花の阻止によって収量の増加も期待される。PCPによる開花抑制はインドでは明らかな実用性がある。しかしながら薬剤費の低減および効果的な散布技術の利用について改善の余地がある。

(抄録 東 清 二)